

○議長（鈴木和彦君） 次に、堀
努君。

〔堀 努君登壇〕

17○堀 努君 今回の大項目、グリーン社会の実現に向けて、これはゼロカーボンシティ表明自治体である本市が2050年を見据えて何をなさねばならないのか、また4次総にグリーンとデジタルという新たな視点を取り入れようとする田辺市長が思い描く未来がどのようなものか、その一端を明らかにするべく主題とするに至りました。

昨年の菅 義偉前首相によるカーボンニュートラル宣言から約一月後、公明党、山梨 渉議員の総括質問に対し田辺市長は、単に国の求めに追随するだけではなく、自治体がこの環境行政をリードしていく、言わば真の地方創生を体現する施策として進めていくと答弁し、グリーン社会の実現に向けてその決意を語りました。

本市では、目下、行政、市内経済界、学識経験者、市民団体が構成する脱炭

素社会に向けた官民連携協議会が発足しました。今後、政府が掲げる経済と環境の好循環につながる議論が深まるものと期待し、そしてオクシズを有する本市の地域の特色を生かした再生可能エネルギーの普及促進や、JR清水駅東口の先に広がる清水港の遊休地を活用した災害に強く環境に優しいエネルギーの分散化などの環境施策により、グリーントランスフォーメーション、とりわけ清水区の産業構造や社会構造に新たな変革をもたらし、地域活性化に寄与することを願っております。

さて、ここから本題に移ります。

先月末時点で、492もの自治体がゼロカーボンシティを表明し、それぞれ目標達成に向けて知恵を絞っております。

田辺市長は、さきの国要望において、国策定の地域脱炭素ロードマップにおける先行地域への登録を目指すと発言されました。果たして先行地域として認められる本市の環境行政施策とはどのようなものか。私はグリーン社会の実現は、自分自身を含め、市民一人一人の行動変容と人材育成が鍵となるとの考えの下、持続可能な動植物園構想

を新たな一手として提案いたします。

なお、植物園に関する総括質問は、今回で3回目となります。

植物園が果たすべき役割として、種の保存、環境教育、調査研究、レクリエーション、以上の4つであることは以前の総括質問で述べたとおりです。今回は、その中の1つ、環境教育を提案理由として以下に述べさせていただきます。

まず、前提として、本市ではグリーン社会の実現を念頭に、2030年度を目標年次とする環境教育行動計画を今年度改定しました。その内容には、一人一人が環境問題に向き合い、意識やライフスタイルを転換していくことが不可欠であり、このような行動ができる人材を育む環境教育こそがますます重要になっているとの理念が示されています。

今回提案する植物園構想は、レクリエーションとしての観光施設や都市緑化機能に資する都市公園施設としての機能に加え、カーボンニュートラルの視点を加えた、まさに環境教育に資する社会教育施設としての整備を目指しております。そうすることで、国の財

政的支援や民間のESG投資につながるのではないのでしょうか。

次に、田辺市長が今年2月の施政方針で、脱炭素社会の実現は、本市がSDGs未来都市として希求する重要な目標の1つと発言したとおり、例えばSDGsの開発目標13、気候変動に具体的な対策を、をはじめとする全ての開発目標は、グリーン社会の実現と何らかの結びつきがあると考えられます。

そして、私が以前、総括質問で動植物園の循環型システムについて提案した折、田辺市長は、本市が目指す開発目標、陸の豊かさを守ろうと方向性を同じくするものだと評価していただいたとおり、私の提案する植物園構想は、SDGsを理念としております。したがって、動植物園構想とグリーン社会実現に資する施策は、SDGsとのつながりから同じ方向性であると言え、本市の環境行政に資する施策であると言えます。

また、SDGsの本市における市民認知度は、3年前の28.8%から今年に入り66%にまで向上していることから、SDGsを根拠とした丁寧な説明を心がけることで、植物園構想に対する市

民理解が深まり、実現に向けて機運が高まることが期待されます。

岸田文雄首相は、今年10月の所信表明において、早く行きたければ1人で進め、遠くまで行きたければみんなで進めと述べられております。これは、以前に田辺市長がよく語っていた、1人の100歩より100人の1歩と同じ趣旨の発言であると認識しております。

30年後のカーボンニュートラルという長い道のりを産学官金民による協働で目指していくことはもちろんのこと、市民一人一人の主体的な取組、そしてみんなで大きな1歩を踏み出すことこそ、遠い目的地に到達するための答えなのではないでしょうか。その大きな1歩を踏み出すための植物園を田辺市長はいかがお考えでしょうか。

そこで、伺います。

4次総にグリーンという新たな視点を取り入れることを踏まえ、田辺市長は植物園についてどのような印象をお持ちであるか、お答え願います。

以上で1回目の質問を終わります。

18〇市長（田辺信宏君） 私からは、大項目、グリーン社会の実現に向けてのうち、持続可能な動植物園構想、4

次総にグリーンという新たな視点を取り入れることを踏まえ、市長は植物園構想についてどのような思いを持っているのかとの質問にお答えいたします。

大前提として、気候変動による異常気象や激甚災害の増加などにより、これまでの成長拡大を前提とした社会は、限界に達していると考えます。この現状を踏まえ、私は、これからの時代においては成長拡大から成熟・持続可能な社会へ転換すること、つまりサステナビリティ——持続可能性が必須の視点であるとの思いを強くしています。

そこで、4次総では、この持続可能なまちづくりを進めていくために、脱炭素社会の実現とともに、民間の投資、イノベーションを呼び起こすグリーンというキーワードを新たな視点の1つとして取り入れることといたしました。具体的には、4次総の様々な政策・施策について脱炭素に配慮した取組にしていくこと、すなわちグリーンの視点を持って検討することといたします。

また、現在、脱炭素社会に向けた官民連携の会議にて検討が進められてお

りますが、再生可能エネルギーの最大限の利活用、水素利用の促進などといった取組に加えて、二酸化炭素を吸収して固定する機能を持つ森林など、植物が持つ機能を生かした取組も進めていきたいと考えております。

議員の植物園構想についての質問は3回目だと指摘をしておりましたが、その熱意に敬意を払いたいと思います。

こうした植物の機能を生かした取組を考えるときに、花と緑にあふれる植物園は、市民の皆さんの憩いの場としてはもちろん、植物を通じて地球環境について思いをはせる機会を提供する施設という点において、大変意義深いものだと認識をしております。

御承知のとおり、静岡市は3,000メートル級の南アルプスから駿河湾に至るまでの広くて豊かな自然環境を有しており、この資源を大切に保全し、活用し、さらに次の世代に残していかなければなりません。植物園は、学術・研究の点から、こうした貴重な自然を守っていく機能を備えるものと期待をされております。また、緑化に関する知識や技術の市民の皆さんへの提供を通じて、将来の脱炭素社会を担うであ

ろう人材を育成するといった機能や、グリーンツーリズムといった観光交流の観点からも期待されるものであります。

これらに加えて、植物園が緑化に関する相談窓口となって、自然を愛する多くの市民の皆さんの緑化活動を支援したり、地域の植物の保全を支えたりすることを通じて静岡のまちの風景がより緑豊かなものになるとともに、植物による大気中の二酸化炭素の低減に寄与するものと考えられます。

植物園構想はこうした可能性を秘めており、私は、静岡市におけるグリーンの象徴的な施設になってもらいたいと考えております。そして、その魅力が国内外に広く情報発信されていき、SDGsのゴール13、気候変動に具体的な対策を、目標15、陸の豊かさを守ろうに貢献することによって世界に輝く静岡の実現にも結びつくものと考えております。

現在、コロナ禍で少し止まっておりますが、ポストコロナの時代、今後は施設自体が脱炭素、グリーンの取組を推進していくなど世界水準の都市にふさわしい新しいタイプの植物園を目指

すべく、来年度から構想づくりに向けた検討に着手してまいります。引き続き議員の御指導・御支援をお願い申し上げます。

〔堀 努君登壇〕

19〇堀 努君 市長から御答弁いただきました。

意見・要望は3回目で述べたいと思います。

それでは、2回目は各論に移ります。

私が本会議で質問した過去2回の植物園構想を振り返ると、平成29年の都市局長答弁では、魅力的で風格のある都市、世界に輝く静岡の実現のため、本市にふさわしい植物園の在り方をみどりの基本計画の改定に併せ調査研究する。また、平成30年の市長答弁では、来年度は静岡市みどりの基本計画の改定を予定しており、その中に位置づけるために、さらに都市公園審議会にお諮りして多角的にこの植物園構想について議論を深めていくとの発言がありました。

政策立案は、証拠に基づかなければなりません。したがって、植物園構想をみどりの基本計画に位置づけることで政策目的を明確にし、合理的根拠を

市民に示すことは、政策の実現に向けて必要不可欠なプロセスであると考えます。

今回の総括質問をするに当たり、みどりの基本計画の改定状況を確認したところ、新型コロナウイルス感染拡大などの社会情勢の影響から遅れが生じたとのことで、結果、今年度に入りようやく改定業務に着手した旨、説明がありました。

前回の市長答弁から3年たちましたが、今回の改定内容に植物園構想がどの程度反映されるのか、期待と不安が入り交じり、私の心は穏やかではありません。そんな不安な気持ちを払拭すべく、都市局長に対して伺います。植物園構想の策定に向けて、今後どのように取り組んでいくのか、お答え願います。

次に、平成29年の都市局長答弁で、植物園は姉妹都市、友好都市などの国内外の賓客をお迎えした際の記念植樹の場として活用することにより、日本中、世界中の樹木や花々が鑑賞できる公園ともなり得るものと想定しているとの前向きな発言がありましたが、植物園の実現には時間を要することが想

定されるため、私は当時の意見・要望で、まずは賓客が訪れた際の記念植樹を可能とする場所の選定とその仕組みづくりに取り組んでいただくようお願いしました。その後の進展について、3年ほど前に記念植樹地を日本平公園に決定した旨、聞き及び、また令和元年の自民党、平井正樹委員に対する委員会答弁で、日本平公園内平原ゾーン南端において整地を行い、園路等を設置するとの説明があったことを確認しております。

新型コロナによるパンデミックはいまだ収束しておらず、現時点で海外から賓客を迎え入れる状況ではありませんが、アフターコロナを見据えチャンス逃さないように、いつでも記念植樹ができる準備をしていく必要があると思います。

そこで伺いますが、記念植樹エリア確保への取組状況とその概要はどのようなか、お答え願います。

以上で2回目の質問を終わります。
20〇都市局長（宮原晃樹君） 植物園構想と記念植樹エリアについての2点の質問にお答えいたします。

まず、植物園構想の策定に向けて今

後どのように取り組んでいくのかについてですが、植物園は、単に植物を収集、保存、展示し、花と緑による市民の憩いの場となる施設ではなく、植物の調査研究による知識の普及や社会教育、環境保全のほか、地域の緑化推進など多くの機能を有する施設です。

また、植物園には、都市緑化植物園や植物公園など様々な形態があることから、多角的に議論を深めた上で、今年度から3か年かけて改定する静岡市みどりの基本計画に、本市が目指す植物園構想を位置づけてまいります。

植物園の実現に当たっては、持続可能な施設運営や市民ニーズを踏まえた規模や内容、事業手法を検討する必要があるため、構想の策定に向けて当面は次の3つの取組を進めてまいります。

1つ目は、既に都市局で実施している若手職員主体の検討会を拡充し、局間連携によるプロジェクトチームを立ち上げ、植物園を花と緑による癒やしや憩いの場とするだけでなく、環境、観光、教育などの幅広い視点から本市の目指す植物園の方向性を研究していきます。

2つ目に、現在も取り組んでいる園

芸市やあさはた緑地のイベントにおいて他都市の事例紹介など植物園の魅力をPRするとともに、アンケート調査を通して市民ニーズの把握に努めてまいります。

3つ目に、植物園実現の第1歩として、植物園機能の一つであるみどりの相談所の開設に向けた社会実験を実施したいと考えています。みどりの相談所は、植物に関する相談や地域の緑化推進の窓口として、緑豊かなまちづくりを推進するもので、社会実験を通して市民の皆さんが期待する相談所について検討してまいります。

こうした取組を通じて新型コロナの影響による経済状況や社会ニーズも見据え、これからの植物園として本市のポテンシャルを最大限生かした、持続可能で静岡らしい植物園の実現を目指してまいります。

次に、前回、議員から御提案を受け実施した記念植樹エリアの整備についてですが、記念植樹は植物の持つ憩いや癒やしの効果を活用し、国内外から来静される要人へのおもてなしはもとより、友好と平和を末永く伝える象徴として植物園の機能を補完するものと

考えております。このため、記念植樹エリアは、地名の由来となったヤマトタケルノミコトの伝説が残る本市を代表する特別な場所、いわゆるユニークベニューである日本平公園を選定しました。風景美術館日本平のコンセプトに沿って、桜などの植樹を想定しており、既に平原ゾーンの一画に、富士山と清水港を一望できる約2,000平方メートルの張芝を施した植樹エリアを準備しております。

当公園への植樹は、日本を象徴する富士山と静岡らしさを演出する駿河湾や茶畑の風景に日本を感じさせる桜を添えていただくことで、名勝日本平と一緒に作り上げる印象的な記念事業となり、当公園の価値をも高めるものと期待しております。このエリアへの記念植樹は、樹木の成長という形で長期にわたり世界中の都市との親交を深めていく、世界に輝く静岡の新たなストーリーの1ページになると考えております。

〔堀 努君登壇〕

21〇堀 努君 3回目は意見・要望です。

2050年、この議場にお集まりの皆様

の大半が私自身を含め第一線から退き、次世代にバトンタッチしていることでしょう。そう考えたとき、果たして30年後の目標に向けた取組に責任を持てるのか、自信を持ってグリーン社会について語るができるのか、正直自信がありませんでした。

しかし、SDGsのゴールは2030年です。また、岸田政権にも引き継がれた、温室効果ガスを2013年対比で46%削減する、いわゆる野心的削減目標も2030年度に設定されております。まずは、10年後のすぐ手が届く未来に向けて、今我々は何ができるのか、そう考えたときに未来に活躍する次世代の人材を育むための社会教育施設が必要であることを先ほどの市長答弁、そして都市局長答弁を受け、確信するに至りました。

さて、植物園の機能と役割を考えたとき、その所管部局は、企画局、都市局、観光交流文化局、教育局など多岐にわたります。先ほど都市局長から、若手職員主体のプロジェクトチームを立ち上げるとの答弁がありましたが、これは非常に大きな前進であると感じております。今後は、局間連携がもた

らず横断的な議論により、政策が加速することを期待しております。

田辺市長におかれましては、若手職員のやる気に応えるべく、現在策定中の4次総内7つの柱の1つ、教育・文化・スポーツの地域づくりの関連計画として、ぜひ植物園を組み込んでいただくよう御検討願います。

次に、日本平動物園の入園者数について、29年度は55万9,000人、30年度は53万9,000人、令和元年度は51万人、そして昨年度は新型コロナの影響で37万2,000人と少しずつ減少しております。来園者数を維持するためには、継続した設備投資を行わなければならない、厳しい財政状況の中、税金を投入することへの正当な理由と市民への説明義務が課されることは以前にも述べたとおりです。

私は、新たな投資として田辺市長が公約で掲げたゾウの家族を招く取組について、52年前の開園来ゾウは日本平動物園の象徴であり、そのレガシーを次世代に継承させようとするものとして応援する立場です。

しかしながら、2年前の自民党、福地 健議員の総括質問によって有力な

輸入相手国であるタイ王国との厳しい交渉状況が明らかになり、今年10月の市長定例記者会見で改めて交渉が難航していることが判明しました。また、今年11月、自民党、繁田和三委員に対する委員会答弁で、別の原産国の調査を開始したとしながらも、動物愛護団体の活動や規制の制定により世界規模で大型動物の輸出入は難しくなっているとの見解が担当者から示されております。ゾウ導入の可否が不透明な状況の今、一連のゾウ園舎新設計画は難航することも予想されます。

そこで提案ですが、ゾウ園舎建設予定地3,000平米を活用し、暫定的に動物園の一施設として植物園エリアを整備してみてもどうでしょうか。あらかじめゾウ園舎建設を前提に造成し、例えば、SDGsアジアゾウの森などと名づけ、来園者が自由に散策するのです。また、この場所の後背地には植物園の有力な候補地として見込まれる自然公園が広がっており、その連続性によって植物園の段階的整備が可能となるというメリットがあります。今後、自民党市議団としてもさらに検討を重

ね、あらためて提言させていただきたいと思っております。

22〇議長（鈴木和彦君） あと1分です。

23〇堀 努君（続） 結びに、岸田文雄首相は所信表明で、ピンチをチャンスに変え、我々が子供の頃夢見たわくわくする未来社会をつくろうではありませんかと訴えかけました。静岡を希望の岡に、日本平を希望の丘にするべく、田辺市長の今後の御決断に期待して、私の総括質問を終了します。